

# 敦煌禪宗資料分類目録初稿

## I 伝燈・嗣承論

田 中 良 昭

### 自 序

#### I

今世紀初頭、中国河西のはて、敦煌の洞窟内で、歴大な数にのぼる写本類——敦煌文献——が、偶然のことから発見されたことは、世界各国の関心と注目を集めるに十分であった。この新発見の敦煌文献は、早速イギリス、フランス、ロシア、日本等各国から派遣された探検家や東洋学者達によって、次々と本国へ持ち去られていった。一方、国宝ともいふべき古文書の数々を国外に持ち去られてしまった中国では、早速その責任者を処刑し、急抛、残部を自国の北京図書館に移しかえた。こうして敦煌文献は、今日イギリスはロンドンの大英博物館、フランスはパリーの国民図書館、ロシアはレニングラードのアジア博物館、日本は旅順の旅順博物館と京都の竜谷大学図書館、中国は北京の北京図書館というように、各国毎に、それぞれスタイン、ペリオ、オルデンブルグ、大谷、北京の各コレクションとして、分割収蔵され、その他に個人の手に帰したものもあった。

このように一千年近くもの間、オアシスの町敦煌の一洞窟内に埋蔵されていた文献の数々に対して、やがて各国の文献学者や東洋学者は、次々と調査の手を加えはじめ、破損の復元、内容の検討、更には総合的な分類というような根気と努力のいる地味な作業が、少しずつではあるが著実に進められていった。そして各国に収蔵されているコレクション毎の分類目録も、既にいくつか刊行されるに至った。今各コレクション毎に刊行された目録類については、昭和43年（1968）6月28日、7月5日、7月12日の三回にわたって開催された岩波市民講座において、京都大学人文科学研究所教授の藤枝晃博士が、「敦煌の写本」というテーマで講義をされた際、「敦煌写本収蔵目録類」と題するプリントによって紹介しておられるので、それに譲りたいが、特に漢文の仏教文献で、今日我々が実際にそ

の内容を知ることのできるものの目録としては、次のような目録類のあることが知られている。

STEIN: (1) Lionel Giles, *Descriptive catalogue of the Chinese manuscripts from Tunhuang in the British Museum*. London 1957.

(2) 劉銘恕他, 「斯坦因劫經録」〔『敦煌遺書総目索引』 pp. 109-252〕北京 1962.

PELLIOT: (1) Paul Pelliot, *Manuscripts de Touen-houang*, Nos. 2001-3511 catalogue. (mimeograph)

(1)' 陸翔漢訳, 「巴黎図書館敦煌写本書目」〔*Bulletin of the National Library of Peking.*〕 VII-6 1923, VIII-1 1924.

(1)'' 羅福萇漢訳, 「巴黎図書館敦煌書目」〔『国学季刊』 I-4〕 1923.

(2) 王重民, 「伯希和劫經録」〔『敦煌遺書総目索引』 pp. 253-313〕北京 1962.

PEKING: (1) 陳垣, 『敦煌劫余録』北平 1931.

(2) 許国霖, 『敦煌石室写經題記与敦煌雜録』上海 1937.

OTANI: (1) 香川黙識編, 『西域考古図譜』二巻 東京 1915.

(2) 羅振玉, 「日本橘氏敦煌将来蔵經目録」〔『雪堂叢刻』 X〕 1914.

(3) 「関東庁博物館大谷家出品目録」〔『新西域記』下巻 pp. 10-23〕 1937.

(4) 西域文化研究会編, 「竜谷大学所蔵敦煌古経現存目録」〔『西域文化研究』 I pp. 223-243〕京都 1958. (油印初版 1953.)

以上の他にも、現在その内容は知られないが、オルデンプルグコレクション中の仏教文献についても、その目録中に記載があり、その他、スタイン、ペリオ両コレクションのチベット文献目録、スタインコレクションのトルキスタン、コータン語文献目録等が、既に完成されている。

日本でも、今日では、整理済部分のスタインコレクション（ジャイルズが目録作製の際小さなものを省略したが、それが約5,000点で、現在整理中という）のフィルム全部をはじめ、ペリオコレクション、北京コレクションのうちのかなりのもののフィルムがもたらされるに至り、それらの詳細な検討が、関東では東洋

文庫、関西では京都大学人文科学研究所において、着々と進められているということである。東洋文庫では、敦煌文献研究委員会が組織され、非仏教文献に関する目録として、

『スタイン敦煌文献及び研究文献に引用紹介せられたる西域出土漢文文献分類目録 初稿、非仏教文献之部 古文書類』I 1964, II 1967.

という二冊の分類目録の初稿が出版されている。一方、京都大学人文科学研究所では、仏教文献（分量的にはこれが極めて多い）の調査研究が、専門家の手によって著々進められているということで、近い将来、日本人による敦煌文献についての総合的な分類目録が完成されることに、大きな期待がよせられているのである。

## II

昭和34年（1959）春より、私は当時東洋文庫の敦煌資料室に常在されていた現北海道大学助教授の池田温氏をはじめ、関係各位の御厚意により、同文庫に所蔵されている敦煌文献の写真を閲覧する機会に恵まれた。当時同文庫には、スタインコレクションについては、ジャイルズカタログにあるものすべてのフィルムが、山本達郎、榎一雄両教授の御尽力によって収蔵されていたが、その他のもので、まとまったものは決して多くはなかった。しかしその後多くの人々の尽力で、ペリオと北京のコレクションのかなりのフィルムが、順次もたらされ、収蔵されるようになった。偶々昭和36年（1961）の夏、池田氏より、既にかなり進んでいた分類目録の内、特に禅に関する部分の調査を依頼され、微力ながら約一ヵ月かかって、禅宗文献のカードを調査した上で、一冊のメモノートを作製した。題こそ「敦煌出土禅籍資料並に研究論文分類目録」などと大げさな名前をつけたが、内容は極めて粗雑なもので、短時日の間に作ったメモにすぎず、せいぜい自分の必要に応じて最小限の検索のできる程度のものであった。

その後、敦煌資料室は、池田氏から現山梨大学助教授の菊池英夫氏へと担当が移り、引続いて菊池氏の御厚意を得て利用させていただいた。昭和40年（1965）6月25日、氏の斡旋によって、東洋文庫談話会において、「敦煌仏教資料——特に禅宗関係資料について」と題して、敦煌禅宗資料についての概説を中心とした発表を行った。また翌昭和41年（1966）9月29日、駒沢大学仏教学部研究会でも、「初期禅宗史と敦煌禅宗資料」というテーマで、ほぼ同内容の発表をしたが、発表後の質疑において、酒井得元教授より、現在実際にみることのできる敦煌禅

宗資料の目録を、『研究紀要』に発表したらどうか、という御意見をいただいた。しかし目録として発表する以上、十分な調査の上で、より完全なものを作らねばならないと考え、そのための積極的な努力もしないままに、既に二年以上の歳月がすぎ去ってしまった。また全部のコレクションをみることのできない現在、完全なものを期待すること自体、到底不可能であることを考えれば、少くとも現在までに知り得た範囲内のものを発表してみたらどうかと思うようになった。従って、今回の発表は、十分な組織的体系化をする以前のメモの整理を意図した初稿としてのものであって、今後できるだけ改訂増補する方向にもっていかうと考えている。

既に、道教文献については、大淵忍爾博士の極めて詳細緻密な分類目録が、『敦煌道経目録』〔京都 1960.〕として出版されているが、禅宗文献についても、近年柳田聖山教授がその大著、『初期禅宗史書の研究』〔禅文化研究所研究報告第一冊 京都 1967.〕の末尾索引の中に、「敦煌・禅宗関係資料一覧」として掲げられたものがある。すなわち、それは、(1)スタイン本、(2)ペリオ本、(3)北京本、(4)敦煌個人所有本、(5)旧旅順博物館本、(6)大谷大学図書館本、(7)竜谷大学図書館本、(8)奈良薬師寺蔵本、(9)旧中村不折氏蔵本、(10)旧石井光雄氏蔵本、(11)旧禿氏祐祥氏蔵本の十一のコレクション中にある禅宗文献を、ナンバー順に排列したものであり、極めて便利なものである。

更に駒沢大学大学院博士課程の石井修道氏は、近年着実な研究成果をあげつつある中国禅宗史研究の動向を、総合的見地から展望され、「中国禅宗史の研究動向」と題して、昭和42年（1967）5月30日、三康文化研究所での中国仏教史談会、及び同年6月3日の大学院研究会で発表され、それを昭和43年（1968）3月15日発行の『仏教学研究会年報第二号』に報告された。この報告は、中国禅宗史のほとんど全域にわたる研究成果を系統的に分類紹介した労作であり、敦煌資料にもとづく研究成果についても、極めて詳細な調査紹介がなされている。

従って、敦煌文献の存在を知る上においては、柳田教授の資料一覧が便利であり、亦問題別の研究動向、論文の有無については、石井氏の報告が大いに役立つわけである。

私の今回の発表は、前述の通り古ぼけたメモノートの整理を目的としたものであるが、結果的には、それが同時に、両氏のなされた秀れた成果の別々の利点を一つに総合する役目を果たすことにもなるかと思う。今後よりよき目録を目指す上からも、記載洩れや誤記等については、専門の方々の御教示御指導を切望する次

第である。最後に、現在東洋文庫の敦煌資料室に常在され、種々便宜をはかって下さっている土肥義和氏に深く感謝の意を表したい。

## 目 録

### 凡 例

1. 本稿では、敦煌禅宗資料を次の6項目に分類した。この6項目は、あくまで便宜的なものであって、この6項目に収めきれないもの、或いは2項目以上にわたるものもあるわけで、その裁量は私個人の判断によった。

- [項 目] I 伝燈・嗣承論  
 II 禅法・修道論  
 III 銘・箴・讚・偈類  
 IV 教理問答・綱要書類  
 V 経注・経序類  
 VI 偽作経論類

2. 敦煌文献は、各コレクション毎に次の略号を用いた。但しスタイン、ペリオ、北京以外については、数も少ないために略号は用いなかった。

[略 号] S = ロンドン、ブリティッシュ・ミュージアム所蔵、スタイン蒐集漢文文書番号

P = パリ、ビブリオテーク・ナショナル所蔵、ペリオ蒐集文書番号  
 字 = 北京、北京図書館所蔵、文書番号

3. 文献目録である以上、一つ一つの文献についての外見的な状態、たとえば、縦幅と横幅、紙質、首尾の完欠、書写年代、行数、表 (Recto) 裏 (Verso)、接続状態、筆蹟等が問われねばならないが、私自身原写本をみていないこと、文献学の専門知識を持ちあわせていないことからして、それは不可能なことである。スタインコレクションについては、ジャイルズカタログが、竜谷大学図書館蔵の大谷コレクションについては、『西域文化研究』Iの「敦煌古経現存目録」が、その要求に応えうるものであるが、他のコレクションについては、現在のところそれらを知るてだてがない。

従って、今回は単に文書番号を記すのみで、文書の外見的な説明は省略し、その文書を移録乃至は研究した文献を、出来る限り記すにとどめた。

4. 研究論文は、当該文書を研究、関説したものを記すことは勿論であるが、直接文書については触れなくても、同一主題を取り扱った論文、著書につい

でも、出来るだけ採録することにした。これについてはかなりの漏脱が予想され、その補充は今後に期したいと思う。

5. 同一項目内での文書の配列は、本来ならば、成立年代順にすべきであろうが、成立年代の不確実なものが多いため、すべてアイウエオ順とした。亦各コレクションの配列順序は、柳田教授の「敦煌・禅宗関係資料一覧」の順位を踏襲し、それにはないものは、最後に加えた。同一コレクション内では文書番号順とした。

研究論文の配列は、論文の発表の古いものから順次記すことにした。

6. 各文献については、著者、成立年代、特性、相互関係等知られる範囲内で〔略記〕として述べた。重要事項で書き落していることが多々あると思うが、これも順次改めていきたいと思っている。

## I 伝燈・嗣承論

### 1 漢法本内伝〔仏法東流伝、仏法初東流伝記、法王本紀東流伝録〕

- ① P 2352    ② P 2626    ③ P 2654    ④ P 2670    ⑤ P 2763  
 ⑥ P 2862    ⑦ P 3376    ⑧ P 3446    ⑨ P 3475    ⑩ P 3740  
 ⑪ P 4032    ⑫ P 4964

〔移録〕 ②⑥⑦吉岡義豊「漢法本内伝成立考」〔『智山学報』3 pp. 67-79〕1955.  
 〔論文〕

吉岡義豊 漢法本内伝成立考〔『智山学報』3〕1955.一後に『道教と仏教』第1に収録

柳田聖山 玄門『聖胃集』について—スタイン蒐集燉煌写本第4478号の紹介—〔『仏教史学』7-3〕1958.

〔略記〕 以上12種の他に、S 5916にも『漢法本内伝』があるが、これは、『歴代法宝記』の該当部分を別出したものである。『歴代法宝記』は、それが資料とした37種の文献名を掲げるが、その30番目に「漢法内伝」とあり、それが本文冒頭に引用されている。上の12種の内、②⑥⑦の3種は、神田喜一郎氏の『敦煌秘籍留真』巻下〔京都 1938.〕にその首部が掲げられ、別にこの3種の写真を所蔵される大淵忍爾氏が、その資料を吉岡義豊氏に貸与され、吉岡氏はこの3種を校訂し、考証されて、前記論文を発表された。『敦煌遺書総目索引』では、⑥は②と相銜接するといひ、吉岡氏は、⑦を含む3種は、各筆致を異にしていて、同一人による書写ではないとされているが、②と⑥

は、確かに巻3の途中で接続し、同一人の書写である。また④⑤⑨⑩は、王重民氏によって撮影され、東洋文庫にその写真がある。吉岡氏によれば、本書の成立は、武徳初年（7年624?）という。『漢法本内伝』は、別に『続集古今仏道論衡』〔T. 52〕として掲げられ、『緇門警訓』巻10〔T. 48〕にも、「漢顕宗開仏化法本内伝」と題して記載されている。また、P 2722の『法王記』は、『歴帝記』『周書異記』と共に、『漢法本内伝』をその資料として用いている。①③⑧⑪⑫は現在のところみることはできない。

## 2 聖胄集〔唐末禅宗雑記付法事（擬）〕

- ① S 2144    ② S 4478    ③ S 5981    ④ P 2722    ⑤ P 2922  
⑥ P 3212    ⑦ 鹹 29

〔移録〕 ⑦ 許国霖『敦煌石室写経題記与敦煌雑録』下輯139右—144左 1937.

- ② 柳田聖山「玄門『聖胄集』について—スタイン蒐集燉煌写本第 4478号の紹介—」〔『仏教史学』7-3 pp. 54-57〕1958.

### 〔論文〕

柳田聖山 玄門『聖胄集』について—スタイン蒐集燉煌写本第4478号の紹介—〔『仏教史学』7-3〕1958.

田中良昭 伝法偈に関する敦煌新出資料二種とその関係〔『宗学研究』3〕1961.

田中良昭 敦煌出土『祖師伝教西天廿八祖唐来六祖』について〔『印度学仏教学研究』11-1〕1963.

田中良昭 唐末の伝燈資料に顕われた禅と密教との交渉〔『宗学研究』5〕1963.

柳田聖山 『宝林伝』の影響と『聖胄集』〔『初期禅宗史書の研究』pp. 394-404〕1967.

〔略記〕『聖胄集』は、『大蔵経綱目指要録』巻8〔『昭和法宝総目録』2巻〕巻末の記載によって、光化中、華嶽玄偉禅師が、貞元已来の出世宗師の機縁を集め、祖偈を将って其の基緒と作し、編纂したことが知られていたが、その存在が知られなかったもので、近年、その一断片である②が、入矢義高氏によって発見され、それを柳田聖山氏が前記論文によって発表されたものである。

本書の成立は、本文中の「至今大唐光化二年己未得九百八十年矣」によって、光化2年己未（899）であること、またその巻数は、『唐書』芸文志及び我が義諦の『禅籍志』巻上によって5巻であったこと、更に、『宝林伝』が

金刻大蔵經に入蔵される際、巻2、巻10の2巻が欠本であったため、『聖胃集』の該当部分で巻2は補ったが、尚巻10を欠いていたこと等、前記柳田氏の論文に詳説されている。

次に⑦は、同じく柳田氏が、入矢氏の御教示によるとして、前記論文の附記に述べられたもので、許国霖氏の『敦煌石室写経題記与敦煌雜録』下輯に収録されたものである。この「唐末禅宗雜記付法事」は、柳田氏から貴重なノートを拝借して筆記させていただいた思い出深いもので、前記附記によれば、『聖胃集』の別本とされている。それを詳細に検討してみると、四つの部分に分けられ、第1が首部を欠く付法伝、第2が『聖胃集』巻1の断片、第3が『仏初興世時記』『付嘱法蔵伝略抄』『法住記略抄』の3種、第4が『分燈之陸経従上西天八（廿八？）祖受記、唐来六代祖師密伝心印』と題する伝法偈である。

この第4の伝法偈は途中で断欠しているが、それに接続するのが、①である。①は伝法偈に続いて、密教の修行の功德と伝持、2種の発願文等96行にわたる密教文献をともない、⑦の最初の禅宗の付法伝を密教的に改変することと関連する。

③と⑥とは、⑦の異本であり、⑤は『祖師伝教西天廿八祖唐来六祖』と題するもので、⑦の第4『分燈之陸経従上西天八（廿八？）祖受記、唐来六代祖師密伝心印』と密接な関係があると思われる。また④は、『漢法本内伝』の〔略記〕でも触れたが、『法王記』というのは恐らく『法住記』であり、それが⑦の第3の『法住記略抄』のオリジナルになったものと思われる。

尚、柳田氏の「敦煌・禅宗関係資料一覧」では、S 276, S 366 の2種を『聖胃集』としておられるが、私は『付法蔵伝』〔擬〕の方へ入れることにした。

特に、『聖胃集』（899）は、同じく禅宗燈史として重要な『宝林伝』（801）と、祖堂集（952）に介在するものとして、その発見は、禅宗伝燈説の展開を知る上に貴重な役割を果すものである。

### 3 伝法宝紀

① P 2634      ② P 3559      ③ P 3858

〔移録〕 ①『大正新脩大蔵經』巻85 古逸部 pp. 1291a-c 1932.

② 神田喜一郎『敦煌秘籍留真』巻下 1938.〔首部のみ〕



- ① 宇井伯寿『禅宗史研究』pp. 436-438 1939.
- ② 神田喜一郎「伝法宝紀の完帙に就いて」〔『積翠先生華甲寿記念論纂』写真1図—7図〕1942.
- ② 白石虎月『続禅宗編年史』附録（三）1943.
- ①② 駒沢大学図書館油印 1956.
- ①② 柳田聖山『初期禅宗史書の研究』資料六 pp. 559-593 図版12-15 1967.

## 〔論文〕

穴山孝道 伝法宝紀に就いて〔矢吹慶輝『鳴沙余韻解説』第2部「敦煌出土支那古禅史並に古禅籍関係文献に就いて」の中に抄録，最初の発表については未詳〕1933.

宇井伯寿 北宗残簡二，伝法宝紀并序〔『禅宗史研究』pp. 422-423〕1939.

神田喜一郎 伝法宝紀の完帙に就いて〔『積翠先生華甲寿記念論纂』pp. 145-152〕1942.

柳田聖山 伝法宝紀とその作者—ペリオ 3559号文書をめぐる北宗禅研究資料の札記，その一—〔『禅学研究』53〕1963.

柳田聖山 『伝法宝紀』の成立〔『初期禅宗史書の研究』pp. 47-58〕1967.

〔略記〕『伝法宝紀』は，当初①のみが知られていた。これは首部完全であるが，達摩章の最初の数行で断欠しているために，完本の出現が待たれていた。昭和11年（1936），神田喜一郎氏がパリのフランス国民図書館で，新たに②を発見された。これは完本であって，②によってはじめてその全貌が知られるようになった。②の全文は，昭和17年（1942），石井光雄氏の『積翠先生華甲寿記念論纂』に写真版で掲載され，更に昭和18年（1943），白石虎月氏が，それを校訂して『続禅宗編年史』の第三附録として公にされた。この②は，神田氏が紹介されたように『伝法宝紀』のみならず，馬鳴造とされる『円明論』，弘忍の『修心要論』，僧稠に帰せられる『大乘心行論』その他数種のものを含む貴重な資料で，柳田氏は，昭和35年（1960），パリに留学中の柴田増実氏の手を経て，②の全体の写真を入手され，それに基づいて，「伝法宝紀とその作者」と題する詳細な研究成果を発表された。更に『初期禅宗史書の研究』では附録「資料の校注」の資料六として，①②の厳密な校定と詳細な注記を掲げられ，解題を付しておられる。柳田氏の解題によれば，②の紙背文書は差科簿といわれ，唐代社会経済史の重要資料として，古くは玉井是博，那波

利貞の両氏によって研究され、近年竜谷大学西域文化研究会編の『敦煌吐魯番社会経済資料』巻下に、西村元佑氏が「唐代敦煌差科簿の研究」と題して関説されているという。以前私が②のフィルムをみることができたのも、東京大学教授の山本達郎氏が、紙背の経済文書の必要性からパリで撮影してこられたものを、当時東洋文庫におられた池田温氏を介してみせていただいたもので、表裏が別々の世界で共に貴重とされている珍しい文書である。この経済文書の最下限は、天宝12年(753)の記録といわれ、それが紙背の禅宗文書の書写年代を推定する一つの目安を提供している。また、最近池田氏の御教示によれば、紙背の上から、②の直前に接続するものがP 3664であり、同じ天宝10載(751)前後の燉煌県差科簿(徭役のための丁男の帳簿)としてP 2657, P 2803, P 3018 があるという。それらの紙背をみるとP 2657は『観心論』, P 2803は『深密解脱要略』, P 3018は『菩提達摩論』(四行論長卷子雑録)というようにすべて仏教文献であり、特に禅宗と密接な関係にあったことが窺われ、池田氏も今後紙背関係からの文献研究の必要性を提唱しておられる。

③については、現在我国ではみることができないが、『敦煌遺書総目索引』によると、「僧伝残卷(存釈弘忍, 釈法如両伝)」とあり、弘忍と神秀の間に法如を入れる独特の系譜を伝える『伝法宝紀』の一残卷であることは間違いないであろう。

『伝法宝紀』の作者については、柳田氏の論文にその考証がなされており、北宗の義福(658-736)や普寂(651-739)が、曾て東都大福先寺で師事した胙法師とされる。京兆杜胙といっているのは胙法師が後に還俗して、俗姓杜氏を名乗ったという神田氏の説を採用され、その成立は、開元初年(713)をさほど降らぬ頃、京兆での編集とされている。

#### 4 付法蔵因縁伝(擬)〔付法蔵伝, 付法蔵因縁経〕

- |          |          |          |          |          |
|----------|----------|----------|----------|----------|
| ① S 126  | ② S 264  | ③ S 276  | ④ S 366  | ⑤ S 1053 |
| ⑥ S 1730 | ⑦ S 1880 | ⑧ S 4478 | ⑨ P 2124 | ⑩ P 2680 |
| ⑪ P 2774 | ⑫ P 2775 | ⑬ P 2776 | ⑭ P 2791 | ⑮ P 2971 |
| ⑯ P 3212 | ⑰ P 3355 | ⑱ P 3727 | ⑲ P 4968 |          |

#### 〔論文〕

水野清一 付法蔵伝と雲岡石窟〔『紀元2600年記念史学論文集』〕1941.

柳田聖山 燈史の系譜〔『日本仏教学会年報』19〕1954.

田中良昭 摩奴羅・鶴勒那付法に関する敦煌新出資料について〔『印度学仏教学研究』9-1〕1961.

田中良昭 付法蔵因縁伝と禅の伝燈—敦煌資料数種を中心として—〔『印度学仏教学研究』10-1〕1962.

柳田聖山 『宝林伝』の構成と西天二十八祖説〔『初期禅宗史書の研究』pp. 365-380〕1967.

〔略記〕『付法蔵因縁伝』6巻は、大正新脩大蔵経50巻に収められ、元魏の延興2年(472)吉迦夜・曇曜の共訳になるものとされている。しかしシナでの偽撰説もかなり一般化しており、『仏法東流伝』等と同じく、長い道仏角法の間にも生まれた偽史の一種であるという説が有力である。

その内容は、仏の入滅後、インドに相伝した24人の付法の因縁を記したもので、最後に第24祖の師子比丘が、ミヒラクラ王のために殺戮され、法が断絶したことを述べて終わっている。

隋唐時代、シナの仏教は、教法の正統性を証するため、釈尊にその根源を求めたが、その目的に最も適切に応えたのが、この『付法蔵因縁伝』であった。すなわち先ず天台の智顛が、その著『摩訶止観』の巻首に、この『付法蔵因縁伝』の24祖の系譜を採用してより、特に伝燈を強調する禅宗の用いるところとなった。『歴代法宝記』の西天29祖説や、敦煌本『壇経』の西天東土33代説、更に後に禅宗系譜の定説となる『宝林伝』及びそれに後続する『祖堂集』『景德伝燈録』等の西天28祖説は、すべてこの『付法蔵因縁伝』の西天24祖説をよりどころとしつつ、それに多少の加上改変を加えたものである。

敦煌文書は、現在までのところ上記19種の存在が知られているが、前記2種の拙稿でも述べたように、はたして『付法蔵因縁伝』といえるかどうか分からない位に、極端な抄録がなされている。例えば⑩では、「聖者師子比丘從尊者鶴勒那夜奢付嘱一代教時」という前書きに続いて、「第廿四代付法蔵人聖者師子比丘」という標題があり、以下本文は、『付法蔵因縁伝』の該当部分を抄録した伝を掲げる。ただすべてに共通する特色は、「仏、摩訶迦葉に付嘱せし正法、展転して我に至る。我今涅槃に入らんとする故に汝に付す。汝当に守護して断絶せしめること勿れ。」という正法付嘱の1文と、「受法後は正法を弘め、衆生を利益し、所作終って捨命するに、衆人舍利を集め

て起塔供養せり。」という正法弘布，起塔供養の1文とが必ずあり，この2文のみのものもある程である。従って，これら1群の文書は，『付法蔵因縁伝』そのものというよりは，『付法蔵因縁伝抄』というべきであり，標題も『付法蔵因縁伝』（擬）とした。スタインの8種はすべて写真が存在するが，ペリオの11種の内では，⑩⑭⑯⑰の4種が王重民氏の撮影，⑱が藤枝晃氏の撮影によってみることができる。問題は実際にみることのできない⑨⑪⑫⑬⑮⑯の6種で，『敦煌遺書総目索引』によると，⑨は「付法蔵因縁経卷第四」というから，或いは抄録ではないかも知れず，亦⑮は，「禪宗世系表存第一至廿三世，即從須菩提至慧遠」というから，『付法蔵因縁伝』とは別の系譜であるかも知れない。須菩提より慧遠に至る23世という系譜は，極めて奇妙であり，禪宗の世系表であるかどうか，関心が持たれるところである。

また『付法蔵因縁伝』の祖師像が，竜門石窟や河南宝山の石窟中に彫像され，その像に刻文されたことが伝えられている。仏像彫刻の上にもこれが依用されたことは注目すべきことである。

## 5 菩提達摩南宗定是非論〔頓悟最上乘論〕

① P 2045    ② P 3047    ③ P 3488    ④ 敦煌・任子宜氏所蔵本

〔移録〕 ②③ 胡適『神会和尚遺集』巻2，巻3 上海 1930.

①②③ 胡適「新校定的敦煌写本神会和尚遺著兩種」〔『中央研究院歴史語言研究所集刊』29 pp. 838-857〕台北 1958.

### 〔論文〕

宇井伯寿 荷沢宗の盛衰〔『禪宗史研究』pp. 195-263〕1939.

柳田聖山 燈史の系譜〔『日本仏教学会年報』19〕1954.

胡 適 校写『菩提達摩南宗定是非論』後記〔「新校定的敦煌写本神会和尚遺著兩種」〔『中央研究院歴史語言研究所集刊』29 pp. 862-873〕台北 1958.

関口真大 神会の南宗独立〔『禪宗思想史』pp. 153-166〕1964.

柳田聖山 『菩提達摩南宗定是非論』について〔『初期禪宗史書の研究』pp. 103-117〕1967.

〔略記〕『菩提達摩南宗定是非論』（『定是非論』と略称）は，神会が北宗排撃をした法論の記録として，南北両宗分派の事情を知る貴重な資料とされるものである。胡適氏が，禪宗史研究で最も力をいれられたのがこの神会であって，神会こそ初期禪宗史の大きな鍵を握る存在ということができよう。

民国15年（1926）パリの国民図書館で②と③の2種を発見された胡適氏は、民国19年（1930）他の神会の著作とあわせて、『神会和尚遺集』4巻として公刊された。すなわち②の『定是非論』の前半に相当する部分を上巻とし、③を下巻として、それぞれ『神会和尚遺集』の2巻、3巻に収めたのである。後に1952年に至って①が発見されたが、その発見の経緯については、柳田氏の『初期禅宗史書の研究』p.114の注④に詳しい。すなわちそれによると、1952年に、リーベンタール氏がジャック・ジェルネ氏の指摘によって、①に含まれる『南陽和上頓教解脱禅門直了性壇語』（『壇語』と略称）を鈴木大拙氏の『少室逸書』中の北京本（寒81）と校合し、英訳（W. Liebenthal, *The Sermon of Shen-hui* [ASIA MAJOR New series III-2 pp. 132-155] London 1952.）されたのが機縁となって、①及びその他を、鈴木、デマチノー両氏がパリの国民図書館で調査し写真にされ、それを胡適氏があらためて調査された結果、①には『壇語』の他に『定是非論』の後半があることを発見された。かくして②③と①とを校合した胡適氏は『定是非論』の全貌を知るに至り、他の神会に関する新研究を加えて、「新校定的敦煌写本神会和尚遺著兩種」として発表されたのである。

『定是非論』は首題奥題共に「菩提達摩南宗定是非論一卷」というように、元来1巻のものであって、これを上巻下巻の2巻とするのは、胡適氏が写本の上から②を上巻、①を下巻（③は下巻の一部）と便宜的に分けたにすぎない。

本文は神会と崇遠法師との問答形式によって展開され、天下の学道者のために宗旨を定め、是非を辨ずる主題と、般若波羅蜜を讃歎称揚する部分とからなり、本文の前後には撰者である独孤沛の造論の縁由を述べた序及び後序と讃文とがつけ加えられている。

この『定是非論』に記された法論は、開元20年（732）正月15日に滑台大雲寺の無遮大会の際になされたものであることが、胡適氏によって論証されている。

尚④は、向達氏の「西征小記一瓜沙談往之一」〔『国学季刊』Ⅶ-1 pp. 1-24〕1950.一後に『唐代長安与西域文明』pp. 337-372 1957. に採録一によるものである。すなわちそれによれば敦煌の任子宜氏所蔵本の中に、梵夾式蝶装本1冊、凡そ93葉があり、その中に『菩提達磨南宗定是非論』『南陽和上頓教解脱禅門直了性壇語』、『南宗頓教最上大乘壇経』、『神秀門人浄覚注金剛般若

『波羅蜜多心經』の4種が収められ、『定是非論』は首部1葉12行を欠くが、その余は俱に完全に整っているという。この1冊には光範の跋があり、五代或いは宋初の伝抄本で、半葉6行の宋蔵の格式をもつと伝えられている。

## 6 楞伽師資記

- ① S 2054    ② S 4272    ③ P 3294    ④ P 3436    ⑤ P 3537  
⑥ P 3703    ⑦ P 4564    ⑧ スタイン蒐集チベット文献プサン目録 710(2)

〔移録〕 ① 矢吹慶輝『鳴沙余韻』図版 75, 76 (1) 1930.

①②④ 金九経『校刊唐写本楞伽師資記』京城 1931.——金<sup>1</sup>

①金<sup>1</sup>『大正新脩大蔵経』卷85古逸部 pp. 1283a-1290c 1932.——大

①②④金<sup>1</sup> 金九経『葦園叢書』奉天 1935.——金<sup>2</sup>

大 宇井伯寿「北宗残簡」〔『禅宗史研究』 pp. 432-435 第七神秀・玄蹟・慧安章, 第八普寂・敬賢・義福・惠福章, pp. 439-440 第六弘忍章, pp. 442-444 序〕 1939.

①②④金<sup>2</sup> 鈴木大拙「楞伽師資記道信伝本文」〔『禅思想史研究』第2 pp. 268-277〕「弘忍伝本文」〔同 pp. 296-298〕 1951.

①②④金<sup>2</sup> 篠原寿雄「楞伽師資記校注」〔『内野台嶺先生追悼論文集』 pp. 132-164〕 1954.

③ 田中良昭「敦煌新出ペリオ本楞伽師資記二種について一特に浄覚序の首欠を補う」〔『宗学研究』4 p. 70〕 1962.

①④④ 柳田聖山「楞伽師資記序」〔『初期禅宗史書の研究』 pp. 625-637〕 1967.

## 〔論文〕

鈴木大拙 楞伽師資記とその内容概観〔『大谷学報』12-3〕1931.—尚これは後に『正法輪』759-771 1933～.『禅の諸問題』1941.『鈴木大拙全集』巻25に収録

矢吹慶輝 燉煌出土本楞伽師資記について〔『宗教学年報』1〕1933.

矢吹慶輝 燉煌出土支那古禅史並に古禅籍関係文献に就いて〔『鳴沙余韻解説』第二部 pp. 482-502〕 1933.

胡 適 楞伽師資記又壇経考〔『論学近著』1-2〕1935.

宇井伯寿 北宗残簡一, 楞伽師資記〔『禅宗史研究』 pp. 420-421〕 1939.

鈴木大拙 楞伽師資記〔『禅思想史研究』第2 pp. 266-268〕 1951.

- 篠原寿雄 楞伽師資記について〔『駒沢大学研究紀要』13〕1955.
- 田中良昭 楞伽師資記と禪の伝燈—浄覚に関する諸問題—〔『駒沢大学仏教学会誌』2〕1959.
- 中川 孝 楞伽師資記の成立について —著者の時代的考察とその思想的背景—〔『東北薬科大学紀要』7〕1960.
- 中川 孝 禅宗史研究資料としての楞伽師資記の内容〔『印度学仏教学研究』9-1〕1961.
- 田中良昭 敦煌新出ペリオ本楞伽師資記二種について—特に浄覚序の首欠を補う—〔『宗学研究』4〕1962.
- 柳田聖山 『楞伽師資記』の形成 その一, その二, 『楞伽師資記』の作者〔『初期禅宗史書の研究』pp. 58-100〕1967.
- 上山大峻 チベット訳『楞伽師資記』について〔『仏教学研究』25・26〕1968.
- 〔略記〕『楞伽師資記』は、弘忍—玄蹟—浄覚と次第する浄覚が、師の玄蹟の著『楞伽仏人法志』を伝持し、それに基づいて開元7～8年頃(719-720)に編纂したと推定されている初期禅宗史の極めて重要な伝燈資料である。浄覚には、後に『注般若波羅蜜多心経』があり、彼自身に立場の推移があったことが窺われる。『楞伽師資記』の特色は、禅宗第1祖とされる菩提達摩を第2とし、それに先立つ初祖として『四卷楞伽経』の訳者グナバダラをもち来ったところにある。また第2菩提達摩章には、弟子曇林序の『略辨大乘入道四行』が依用されて、特色ある達摩の禅法を伝え、第4僧璨章には、仙城慧命のものとされる『詳玄賦』の伝注が、『詳玄伝』として掲げられている。第5道信章は、全体の約五分の二のスペースがさかれて道信の禅法を伝えるが、それは道信の著作とされる『入道安心要方便法門』そのものであるという説が有力である。道信を承けた弘忍の東山法門は、会下に多くの秀れた竜象を打出して、禅がシナ各地に拡大する基盤をなした。『楞伽師資記』はその内の神秀を第7祖とするが、弘忍、神秀の両条は、『楞伽仏人法志』に基くもので、この一卷全体が玄蹟の強い影響のもとに成ったことが窺われる。
- 敦煌文書は漢文7種と漢文からのチベット訳1種の存在が知られている。古くから関心のもたれた文献で、移録に示したように、矢吹慶輝、金九経、宇井伯寿、鈴木大拙等の諸氏による紹介、校定がなされ、近年も篠原寿雄氏、柳田聖山氏等によって校注乃至は完本復元への努力がなされている。
- 先ず①②④は、胡適氏が民国15年(1926)に発見され、鈴木大拙氏の依頼

で金九経氏が校訂し、金氏再度の校訂によって『葦園叢書』に収められ、以後これが主に依用された。篠原氏の校注も前記3本と金氏重校本との校合である。

③⑤は私が王重民氏撮影本の中に見出したもので、③によって序の部分の約200字補ったが、まだ首部は完全にはなっていない。⑤は②の前部に当るものである。⑥は今日見ることはできないが、『敦煌遺書総目索引』によれば、後半を存するといひ、同じく⑦は、開端4行を存するという。従って⑦は③の前部に当るものと考えられるが、⑦を実際にみられた柳田氏によれば、⑦と③の間には尚数行の欠があるということで、現在のところ完全なテキストは得られていない。

一方最近になって、インディア・オフィス・ライブラリー所蔵のスタイン収集チベット文献の中に、『楞伽師資記』のチベット訳、すなわち⑧のあることが上山大俊氏によって発見され、注目をあつめている。上山氏によれば写本としては完結であるが、内容は序文がなく、本文標題（直訳は「リンカの師と弟子との経」という）より始まり、漢文本の第五祖道信章の途中「……識無形、仏無形、仏無相貌」（T. 85. 1287a<sup>14</sup>）までで終わっているということである。敦煌の吐蕃支配によって、シナとチベットとの交流が密接となり、禪宗文献の中にも、両者の交流を示すものとして、宮本正尊氏の紹介された漢蔵対音『大乘中宗見解』、ドミエヴィル氏紹介の『頓悟大乘正理決』、上山氏の研究になる曇曠の『大乘廿二問』等がクローズアップされている。ドミエヴィル氏の「ラサの宗論」、それに対するトゥッチ氏の「サムイエの論争」と共に、この方面の研究成果が大いに期待されている。

尚、『楞伽師資記』の資料、及び研究の経過については、柳田聖山氏の『初期禪宗史書の研究』附録「資料の校注」の中の〔資料八〕『楞伽師資記序』に付せられた解題に詳しい。

## 7 歴代法宝記〔師資血脈伝、定是非摧邪顕正破壊一切心伝、最上乘頓悟法門〕

- ① S 516    ② S 1611    ③ S 1776    ④ S 5916    ⑤ P 2125  
⑥ P 3717    ⑦ P 3727

〔移録〕①⑤『大正新脩大藏経』巻51 史伝部3 pp. 179a-192a 1927.

① 矢吹慶輝『鳴沙余韻』図版76（Ⅱ）1930.

①⑤ 金九経『葦園叢書』奉天 1935.



## 〔論文〕

矢吹慶輝 燉煌出土支那古禪史並に古禪籍関係文献に就いて〔『鳴沙余韻解説』  
第二部 pp. 504-520〕1933.

柳田聖山 燈史の系譜〔『日本仏教学会年報』19〕1954.

柳田聖山 『歴代法宝記』の登場、『歴代法宝記』の構成 その一、その二、その  
三〔『初期禪宗史書の研究』pp. 278-334〕1967.

〔略記〕『歴代法宝記』は、達摩の伝衣が、六祖曹溪慧能のところにありと主張する神会の『南宗定是非論』をふまえ、グナバダラを初祖とする北宗系の『楞伽師資記』の伝燈説を批判しつつ、達摩の伝衣が、則天武后によって取替えられ、東山弘忍の十大弟子の一人劍南智詵に伝えられ、智詵一処寂一無相一無住の四世にわたって相承されたことを述べ、併せて無相の浄衆宗、無住の保唐宗の主張を説いた燈史の一類である。北宗系の『伝法宝紀』『楞伽師資記』に対して、『南宗定是非論』と共に、南宗系燈史の一角を形成する重要な資料である。

この書の成立年代、著者については、明確な記載はないが、後半部分が無住の伝で占められており、しかも無住の示寂を大暦9年(774)6月3日と明記しているところから、無住の門人が、無住の示寂後間もない頃に編纂したものとされている。

特に注目されるのは、西天29代説の主張で、これは『摩訶止観』が依用した『付法蔵伝』の24代に、『禅経』序の西天8代の内、重複する迦葉—阿難—末田地を除く5祖を加上したもので、達摩を菩提達摩多羅乃至は達摩多羅として、菩提達摩との異同に苦慮したことを窺わしめる。

その巻頭には、自ら扱った資料37種を列挙しており、その意味からも多くの資料を提供するものである。

敦煌文書は、従来①⑤のみが知られるに過ぎなかったが、②は僧璨章、③は弘忍、慧能章、④は、内容は『漢法本内伝』であるが、『歴代法宝記』巻頭部分の依用であることが判明している。また⑦は藤枝氏撮影本の中にあり、達摩章の首部であり、⑥は現在みることはできないが、『敦煌遺書総目索引』によれば、「開端残欠数行」ということである。